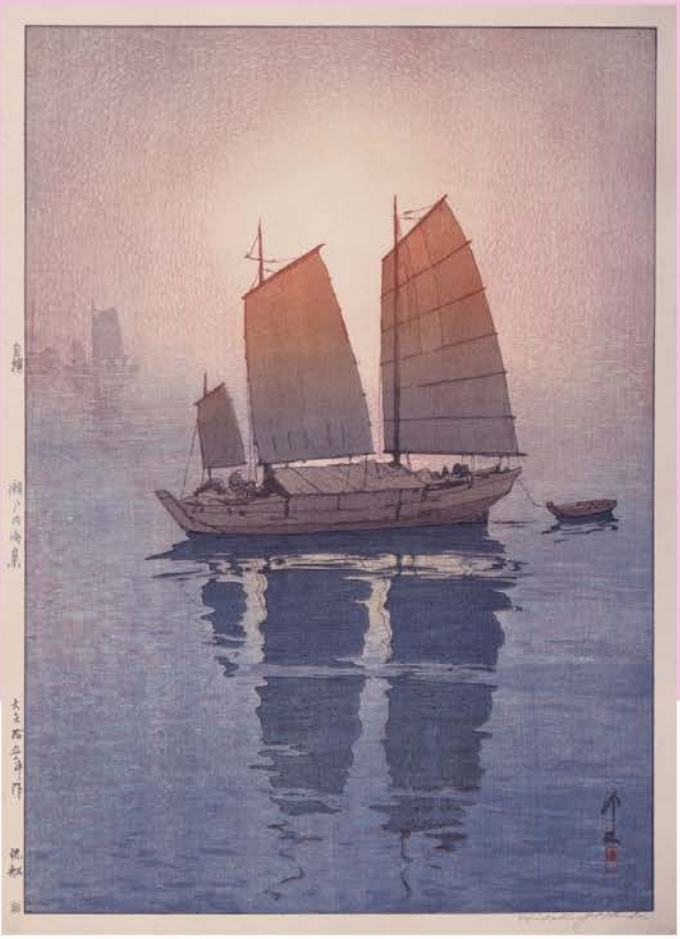
press release

COLLECTION EXHIBITION

Five Category Showdown

Master versus disciple, East versus West...



吉田博《朝》『内海集『帆船 朝』』1926年

春の所蔵作品展

対決！5番勝負

― 師vs弟子、東vs西…

春

2019年4月17日(水)～6月30日(日) 2階展示室

[開館時間] 9:00～17:00（金曜日は20:00まで開館）※入場は閉館の30分前まで
[休館日] 月曜日 ※特別展会期中・祝日・振替休日を除く　※5月20日は、展示替のため所蔵作品展は閉室
[入館料] 一般510(410)円／大学生310(250)円 ※(　)内は20名以上の団体
[縮景園共通券] 一般610円／大学生350円
※高校生以下無料　※当館で開催中の特別展入館券にて無料でご覧いただけます。
※障害者手帳をお持ちの方や65才以上の方、県内の大学に在学する留学生の方などは無料(1階総合受付でお申し出ください)。

広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014 広島市中区上幟町2-22 tel.082-221-6246 fax.082-223-1444
http://www.hpam.jp/

press release

対決！5番勝負
— 師vs弟子、東vs西…

【概要】

春の所蔵作品展
対決！5番勝負—師VS弟子、東VS西・・・

1968（昭和43）年に開館した広島県立美術館は、1996（平成8）年に現在の建物に生まれ変わり、昨年は開館50周年の節目を迎えることができました。

開館以来、多くの方々のご協力を得て、コレクションを充実させてきました。収集重点方針として「広島県ゆかりの美術」「1920～30年代の美術」「日本およびアジアの工芸」を掲げ、現在は総数5,000点を超えています。

今期の所蔵作品展では、春の特別展「挑む浮世絵　国芳から芳年へ」（会期：4月13日～5月26日）に触発されて、「対決！5番勝負」と題した5つの展示が生まれました。特別展同様にさまざまな分野で師と弟子を切り口に、あるいは版画技法に着目して西洋美術における木版と銅板そしてリトグラフ（石版）、近代日本で花開いた創作版画と新版画を対比しつつ、浮世絵とも対峙させます。さらに東日本と西日本の作家もピックアップいたします。

来館するごとに新しい美の魅力を発見し、心和んでいただける展示をめざし、今後も努力を重ねていくことで、美術館を支えてくださる皆さま方への感謝の気持ちを表してまいります。今年度の所蔵作品展にもご期待ください。

【内容】

①工芸篇 師匠と弟子

対決！5番勝負の最初に登場するのは、工芸にみる師匠と弟子です。今回は、4組の師弟関係をご紹介することで、師匠と弟子それぞれの表現や感性が引き立つことでしょう。

まず、広島出身の漆芸家・六角紫水と戦後の「漆の神様」と呼ばれた松田権六はともに文化財保護にも尽力し、京都の楠部彌弌と竹原にも工房を持つ今井政之はともに文化勲章の栄誉に輝きました。また、紬と絣の名手・宗廣力三と広島市出身の渡辺溥子はともに絣の表現に邁進し、色絵技術を究めた加藤土師萌と絵画的表現を求めた藤本能道はともに重要無形文化財〈色絵磁器〉保持者に認定されています。

中国・戦国時代、紀元前4 - 3世紀に生きた荀子の言葉に「青、取之於藍、而青於藍（青はこれを藍より取りて藍より青し）」（『荀子』勧学篇第一）があります。藍は染料植物のアイのこと。藍の葉で染めた青色は藍葉よりも青く染まります。師匠と弟子になぞらえて、弟子が師匠を超える意味となります。美術の世界でも、師匠と弟子は時に瑞々しい藍のように、あるいは両者並び立つように業績を成しとげました。

さぁ、師匠と弟子の競演をお楽しみください。

六角紫水《蒔絵草花図菓子銘々盆》1911年
木・漆・貝・蒔絵・螺鈿

松田権六《水蒔絵平卓》1941年
木・漆・蒔絵・螺鈿

press release

②西洋美術篇　木版と銅版、そしてリトグラフ

洋の東西を問わず、版画技法は複製性の高さから情報伝達の手段として発達しました。一方、芸術家は、他の描法では成し得ない版画独自の表現を追求してきました。この展示室では、特別展「挑む浮世絵　国芳から芳年へ」にちなみ、西洋美術における多様な版画表現に着目します。

最古の印刷技術である木版は、ヨーロッパでは15世紀半ばにグーテンベルクにより活字を使った活版印刷が発明されると、聖書を始めとする様々な書物の挿絵に用いられるようになりました。表現は素朴で温かみがある反面、緻密な線描写が不得手で一旦は衰退しましたが、19世紀末に西洋へ浮世絵がもたらされることで再評価されます。ここでは、古代への憧憬を描いたマイヨールの挿画本を紹介します。

銅版は、版材に銅の板を用いることで繊細な線表現を可能とし、複製版画の流通が盛んになる16世紀以降、その再現性の高さから長く主流を担いました。巨匠レンブラントの巧みな線表現や、ルオーによる重厚な色彩表現をご覧ください。

リトグラフは18世紀末にドイツで発明された、主に石灰石を版材とする技法です。筆触がそのまま版画になるため表現の自由度も高く、近代の画家たちに好まれました。ここでは、新時代の芸術を目指したリシツキーらの版画集を展観します。

技法ごとの特徴を活かした、多種多様な版画の世界を見比べてお楽しみください。

ワシリー・カンディンスキー《小さな世界Ⅸ》1922年
紙・木版・リトグラフ・ドライポイント

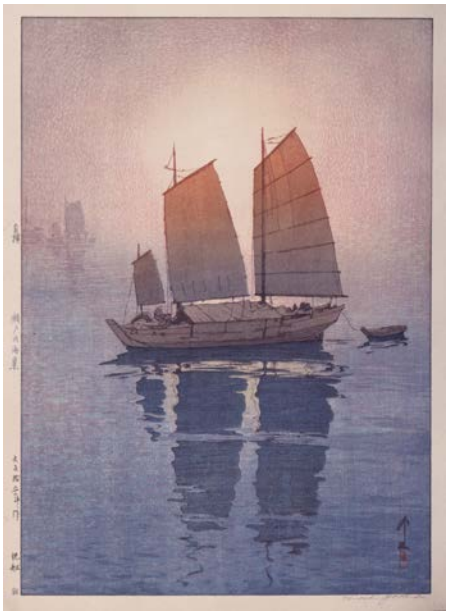
③日本洋画篇　近代版画の展開—創作版画と新版画

この展示室では、特別展「挑む浮世絵　国芳から芳年へ」の開催にちなみ、展覧会で紹介する後の時代にあたる明治末期以降の木版画を特集します。

明治後期に起こった創作版画は、絵師や彫師、摺師が分業して生み出す浮世絵などの伝統的な木版画に対して、「自画・自刻・自摺」を制作の基本としました。作者が全ての工程を担うことで、その独自性と創造性を直截に発揮しようとしたのです。個性を尊重する近代的な意識や、西洋の近代版画の芸術性にも触発されて創作版画への関心は高まり、大正期には版画家たちが結集して日本創作版画協会が設立されます。

一方で、伝統的な木版技術の復興をめざす動きも表れました。かつての職人技術を取り戻し、版元、画家、彫師、摺師の協業により新作版画を作ろうとする、いわゆる新版画の動きです。

このたびの特集では、創作版画の系譜に属する南薫造、小林徳三郎、永瀬義郎ら8作家と、新版画を代表する吉田博と川瀬巴水の作品を紹介します。江戸の浮世絵版画を経て、近代にふさわしい版画を志した二つの動きと戦後に続く展開を、小林千古や靉光、菅井汲ら常設展示作家の作品とともにお楽しみください。



吉田博《瀬戸内海集「帆船　朝」》1926年
木版・紙

④日本画篇 師匠と弟子

この展示室では、当館所蔵の日本画作品から、4組の師とその弟子の関係をご紹介します。

1つ目は、竹内栖鳳を師とする京都市立絵画専門学校および画塾「竹杖会（ちくじょうかい）」の弟子たちです。栖鳳は文展審査員を務めながらも、土田麦僊、村上華岳らが反文展を掲げて設立した国画創作協会の顧問となり、弟子である彼らを精神面で支え続けました。

2つ目は、児玉希望とその弟子、奥田元宋と佐藤太清の関係です。希望の内弟子として、師の制作の傍らで岩絵具を溶き、師の技法を見ることで学んだ2人は、師から「誰のマネもするな」と教えられ、それぞれの画業を花開かせました。

3つ目は、田中頼璋と丸木位里。位里は最初、旧派の大家であった頼璋に学ぶものの、旧態依然とした師の制作に対し「こんなことをやっていてもどうしようもない」と反発し、日本画の前衛運動に身を投じました。

4つ目は、速水御舟と船田玉樹。御舟が若くして亡くなったため師事した期間は短いものの、シュルレアリスムや抽象表現にさえ挑戦する玉樹の姿勢には、生涯に渡って師の影響が感じられるように思います。

師は何を教え、弟子は何を受け取ったのか—さまざまな師弟の関係から、日本画の表現世界の面白さ、奥深さを感じ取っていただければ幸いです。

児玉希望《飛泉淙々》1931年
絹本彩色

奥田元宋《青山白雲》1987年
紙本彩色

⑤工芸篇 東と西

この展示室では、作家の地域性に焦点を当て、東西に分けて対比的に展示しながら、近代以降の日本の工芸を俯瞰します。

陶芸界における東の代表作家としてまず挙げられるのが、陶芸家として初の文化勲章を受章した板谷波山、それに対し、西は初の重要無形文化財保持者（人間国宝）の一人に選ばれた富本憲吉でしょう。ともに近代陶芸のパイオニアと称せられ、工芸家団体の会長や大学の教授を務めるなど、一作家としてのみならず指導者としても重要な役割を果たしました。続いて東からは、波山の弟子であり益子焼の発展に尽力した浜田庄司、同じく益子で作陶した加守田章二らの作品を、西からは、伝統的なやきものの地・京都を拠点に革新的な造形を確立した河井寛次郎や八木一夫らの作品をご覧いただきます。

さらに、ガラス工芸・染織・金工・漆芸の各分野において、東は東京、西は京都そして広島などを舞台に活躍した作家をご紹介します。

陶芸を中心に、工芸の各分野の作家を加えた多彩な作品を通して、工芸の面白さを再発見していただければ幸いです。

板谷波山《氷華磁草花文花瓶》
制作年不明　磁器

富本憲吉《白磁壺》1928年　磁器

press release

対決！5番勝負
―師vs弟子、東vs西…

【関連イベント】

① 学芸員によるギャラリーリレートーク

当館学芸員が各室の見どころをリレー形式でご紹介するトークイベントです。

日時：2019年4月26日（金） 15:00～（1時間程度）

場所：2階 展示室

講師：岡地 智子（おかじ さとこ）、森 万由子（もり まゆこ）、藤崎 綾（ふじさき あや）、神内 有理（じんない ゆり）（当館学芸員）

※ 申込不要、要入館券。会場入り口でお待ちください。

※ 高校生以下、65 歳以上の方は無料です。学生証および年齢のわかる証明書をご提示ください。

② 友の会ボランティアガイド

当館友の会ボランティアガイドが所蔵作品展についてわかりやすく解説します。

日時：平日14：00～／土日祝11：00～、14：00～（1時間程度）

場所：2階 展示室

参加料：無料

※要入館券（高校生以下無料）、申込不要

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も**本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。**

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、
1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014　広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246　FAX.082-223-1444

E-mail　iroeuma2@gmail.com

担当　学芸課　神内 有理

　　総務課　広報担当　弘津 かおる、一色 直香